

川村文化芸術振興財団ソーシャリー・エンゲイジド・アート支援助成
2018年度対象プロジェクト決定！

プレス各位

拝啓

時下、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

このたび川村文化芸術振興財団では、日本初となるソーシャリー・エンゲイジド・アートに対する支援助成事業を開始し、支援対象となるプロジェクトの公募をおこないました。その結果、日本国内外から67件（海外34件、国内33件）の応募があり、厳正なる審査の結果、下記のプロジェクトへの支援をおこなうことに決定いたしましたので、ご報告させていただきます。

本件につきましては、2018年3月に記者会見をおこない、アーティストによるプロジェクトの概要説明と贈呈式がおこなわれます。なお、本プロジェクトに対しては、当財団より上限500万円の支援がおこなわれます。

皆さま方におかれましては、ぜひ本件につきまして記者会見へのご出席と取材を賜りますよう、お願い申し上げます。

それでは時節柄、どうぞご自愛下さいますようお願い申し上げます。

敬具

■2018年度助成対象プロジェクト

申請者名：一般社団法人 PortB

申請プロジェクト名：新・東京修学旅行プロジェクト

■記者発表・懇親会

日時：2018年3月12日（月）
14:00～15:00（贈呈式・記者発表）
会場：国際文化会館
住所：東京都港区六本木5-11-16
URL: <http://www.i-house.or.jp/>

都営大江戸線 麻布十番駅 7番出口より徒歩5分
東京メトロ南北線 麻布十番駅 4番出口より徒歩8分
東京メトロ日比谷線 六本木駅 3番出口より徒歩10分



【お問い合わせ・記者発表会のお申し込み】

本件の広報にご協力賜りたくお願い申し上げます。

一般財団法人 川村文化芸術振興財団（担当：水谷）

東京都千代田区外神田 2-15-2 HP: kacf.jp メール: info@kacf.jp

■2018年度助成対象プロジェクト概要



photo by 山岸剛

申請者名：一般社団法人 PortB

申請プロジェクト名：新・東京修学旅行プロジェクト

『新・東京修学旅行プロジェクト』は、難民（申請者と不認定者を含む）を「ガイド」に東京を「修学旅行」するプロジェクトである。この旅行を通じて、参加者は難民の実態を知ることになる。難民と交流するようになる。難民の目から見た東京を見る。東京にある難民の痕跡を知る。またドキュメント化することで後から学ぶ体験が可能になる。これはリサーチ・教育・創作活動であり、同時に難民との交流事業である。

ツアーの内容は、例えばクルド人の中高生が東京に修学旅行に来たとしたらどこを回るのかという発想で作る（クルド人ツアーであれば埼玉県蕨市訪問は必須になるだろう）。ツアー参加者は東京の住人でもよいし、もちろん「ガイド」以外のクルド人難民や、クルド人中高生が参加してもよい。

本プロジェクトは、難民問題に演劇的手法で応答し、政治や経済からは生まれない新しい社会参加のあり方を示す。「難民」として一括りにされがちな人々との出会いや時間をかけた関係づくりを創造的に発展させ、歴史的な理解に基づく寛容な社会の構築を目指す。ツアーのテーマは「アジア」と「戦争」とし、2020年の東京オリンピックへ向かう都市、国家、政治の祝祭的統合とは異なる学びの場をつくる。演劇史におけるベルトルト・ブレヒトの「教育劇（learning play）」の理念と日本の「修学旅行」を、難民問題を軸に結びつけ、東京にあえてこだわり、東京を地方や辺境、亡命地として捉える「視力」を鍛えていく。



photo by 河野翔太



photo by 山岸剛

■川村文化芸術振興財団 ソーシャリー・エンゲイジド・アート支援助成について

一般財団法人川村文化芸術振興財団は、文化芸術により人々の創造性や表現力を育み、よりよき社会の構築を目指すために 2017 年 2 月 15 日に設立されました。当財団は優れた能力を有する芸術家に対し活動を支援し、これまで培われてきた文化芸術を継承、発展させ、独創性のある革新的な文化芸術の創造を促進することを目指します。

当財団初の事業として、ソーシャリー・エンゲイジド・アートのプロジェクトに対し支援する助成制度を開始いたします。めまぐるしく変化する近年の世界状況に対し、現代美術の関心の主流はいかに社会との関係性において創造力を発揮できるのかという点に集まってきています。アーティストの多くは、自ら社会の中に積極的に入り込み、社会の中でアーティストとしての能力を発揮することを選択しています。本助成事業はコミュニティや社会にコミットし、地域社会や住民とともに制作や活動を実施し、より良い社会モデルの提示や構築を目指す国内のソーシャリー・エンゲイジド・アートのプロジェクトに対して、毎年 1 件採択し助成支援をおこないます。

ソーシャリー・エンゲイジド・アートに対する助成支援制度は日本初の試みとなります。助成対象は年齢・国籍不問とし、海外からの応募も積極的に受け付ける予定です。

■ソーシャリー・エンゲイジド・アート支援助成にあたり

一般財団法人 川村文化芸術振興財団

理事長 川村喜久

グローバルな時代を迎え、日本のアーティストたちも日本国内外において広く活躍するようになり、ここ数年でアーティストの活動を支援する助成制度や顕彰も充実してきました。そうした中、国際的なアートの現場において、環境問題や経済格差、あるいは移民問題などといった諸問題に対し、アーティストがコミュニティや社会に直接関わり、より良い社会の実現を目指すソーシャリー・エンゲイジド・アートが注目されるようになってきています。

しかし、国内ではまだソーシャリー・エンゲイジド・アートの実践について広く知られていないため、そのような活動を本格的に支援する制度は国内にはありませんでした。こうした状況を鑑み、このたび川村文化芸術振興財団では、国内初のソーシャリー・エンゲイジド・アート支援助成制度を開始いたします。本制度を通じて、ソーシャリー・エンゲイジド・アートの社会的意義や可能性が広く理解され、未来に向けたより良い社会づくりを目指すアーティストの実践がより活発になることを目指します。皆さまの意欲的かつ革新的なプロジェクトの応募を期待しています。

■ 審査員による選考所感



秋元雄史
東京藝術大学大学美術館館長

第一回目となる「2018年 ソーシャル・エンゲイジド・アート支援助成」の審査が行われた。まだ一般的には聞き慣れない言葉であるということもあってか、募集要項の冒頭では「ソーシャル・エンゲイジド・アート (SEA)」について括弧に入れて説明している。

そこでは「社会と関わり、参加・対話のプロセスを通じて、・・・」云々とある。切り口次第で社会は無限の広がりを見せるし、アプローチも多様であるから、つまり対象とするアート活動は、かなり幅広い。

私個人の印象だが67件という応募総数は多いと感じた。企画書に眼を通しながら、そこから一件に絞るのは大変だと思った。実際、「これも、これも、」という具合に、気になる企画がいくつもあった。

最後は審査員間のディスカッションによって一件を選ぶことになった。

一回目にふさわしいものが選ばれたと思う。

これによって第一回目「2018年 ソーシャル・エンゲイジド・アート支援助成」の中身が出来た。



工藤安代
NPO 法人 ART&SOCIETY
研究センター代表理事

日本において2017年にソーシャル・エンゲイジド・アートという今日のアート表現活動への支援助成がはじまったことは大変意義深いことだと感じています。初回にも関わらず数多くの応募があり、海外・国内からほぼ半々の結果となったことはこの助成に対するグローバルな関心の高さを表わしているのではないのでしょうか。審査会で最後まで議論がされたプロポーザルには、戦争史や地域社会に光を当て、改めて歴史の再解釈や多文化社会を求めていくもの；福島原発事故の記憶と継承を地元民と共に探るもの等、ポリティカルな課題に真摯に向き合うものがありました。また、生活の中で地域コミュニティと持続可能な協働プログラムを育てていくもの；他分野の専門家らと共に世界の多様な価値観を伝える教育資材を開発し次世代に受け渡そうとするもの等、生活環境や国際社会に目を向けたユニークなアイデアが集まりました。残念ながら今回の選定から漏れたプロジェクトに対しても今後の展開を期待しています。



窪田研二
インディペンデント・キュレーター

日本では初めてとなるソーシャリー・エンゲイジド・アート（以下 SEA）プロジェクトに対する支援助成への期待は高く、同時に SEA の定義を明確化し社会に認知させていく意味においても、この制度の意義は大きいと感じる。それだけに審査員として関わる責任の重さを感じながら、緊張感を持って審査にあたった。今回、社会的に意義のあるプロジェクトから多くの申請があったことは、喜ばしいことであると同時に、最終的に 1 件に絞らなければならなかったのはとても困難を伴った。審査の全般的な感想としては、申請プロジェクトの中で「アートとしての革新的な手法、表現形態」と「参加者との協働創作」の 2 要素がともに両立したものが意外に多くなかったという点だろうか。前者に関しては、より創造的な表現手法を期待したい。そして後者については、プロジェクトの立案時により具体性を持ったリサーチが求められる。その中で今回採択された高山明氏のプロジェクトは秀逸なものであると感じた。



高嶺格
美術家
秋田公立美術大学准教授

世界的にも珍しい分野を特定した助成金で、海外からの応募が約半数を占めた。しかし、社会と関係を結びながら作品を作るという [ソーシャリー・エンゲイジド・アート] の特性上、現場（日本）との情動的／身体的距離が、プロポーザルに如実に現れたように思う。最後に残った数件はすべて日本人作家のもので、それはより深く日本のコンテクストに入り込み、実現可能性を見定めたものだった。結果としてある意味当然であると思うと同時に、海外の作家に授与するためにはどうすればいいのか？ということも考えさせられた。



毛利嘉孝
東京藝術大学大学院
国際芸術創造研究科教授

「ソーシャリー・エンゲイジド・アート」という語は必ずしも日本語に定着していないにもかかわらず、国内外から質の高いプロポーザルが数多く寄せられた。選定は困難を極めたが、個人的には以下の 3 点の基準で選定した。

- (1) 形式的にも内容的にもこれまでにない先進的な表現が見られるか。
- (2) 現代社会が抱える切実な問題に、（芸術に限らず）これまでになかった方法で取り組んでいるか。
- (3) 計画に対する準備が一定程度なされており、期間内に十分な成果が見込めるか。

今回選出された高山明（PortB）さんは、演劇という枠組みそのものを問題化する多くの作品を手がけ、国際的にも評価が高い。今回の提案は、これまでの試みをさらに発展させ、ますます現代社会の重要なテーマになりつつある「難民」という問題に「修学旅行」という独自のフレームワークからアプローチしたもので、第一回の受賞にふさわしい独創的なプロジェクトとして評価できる。プロジェクトの成果を見るのが楽しみである。